

日本臨床外科学会 国内外科研修報告

慶應義塾大学一般・消化器外科での国内外科研修を終えて

琉球大学消化器・腫瘍外科

仲本 正哉

この度、日本臨床外科学会の2023年度国内外科研修制度で2023年7月31日から8月4日までの期間、慶應義塾大学一般・消化器外科において国内研修をさせていただきました。このような貴重な機会をあたえてくださいました、日本臨床外科学会 万代恭嗣会長、国内外科研修委員会 高山忠利委員長に深く御礼申し上げます。そして、研修を快く受け入れて頂いた慶應義塾大学一般・消化器外科の北川教授をはじめ、研修前より連絡を取らせて頂き研修中もご指導頂いた竹内先生、忙しい中にも私に構って頂いたレジデントの先生方、手術を快く見学させて頂いた医局の先生方皆様に感謝申し上げます。

私は現在琉球大学病院で勤務しておりますが、これまで初期研修より離島である沖縄県を離れての勤務歴が無く、その中でも沖縄本島北部の所謂ヤンバル地域を含めた僻地での勤務歴が長く、今回これまで置かれていた真逆の環境である東京という都心かつ最先端医療を見学させて頂きたく、慶應義塾大学一般・消化器外科を研修先として希望いたしました。

今回、できる限り多くの手術を見学したいと希望させて頂き、基本的に上部消化管班の川久保准教授や松田先生をはじめとする先生方に回診やカンファレンスから帯同させて頂き、スケジュールによって腸班や肝胆膵班の手術も多く見学させて頂きました。

まず驚いたのは手術室の数と広さ、そして建てかえられたばかりとのことで、綺麗さでした。手術室の通路から非常に広く、患者の移動を含め機材の移動などを安全に行えると思いました。

手術は食道癌や直腸癌を含め全ての班のロボット支援下手術を見学させて頂き、上部消化管班に関してはロボット支援下手術でない手術が少数となっているとのことで非常に驚きました。琉球大学病院では、肝胆膵領域でのみロボット支援下手術が導入されたばかりであり全てが目新しく、行く行くは沖縄県で私が執刀することを想像しながら目に焼き付けさせて頂きました。また、LECS手術（腹腔鏡内視鏡合同手術）を腹部操作と上部消化管内視鏡操作いずれも川久保准教授が執刀されており、またESDなどの内視鏡的治療も上部消化管班で行っているとのことで、驚きの連続でありました。

私と同世代であるレジデントの先生方は手術の助手やカンファレンスの準備に加え、病棟業務のほとんど全てを任されており、とても私にはできない仕事内容と量であり、現在の私の仕事ぶりを恥ずかしく思いつつ、より頑張らなければならないと思わせて頂きました。また、そんな忙しいレジデントとして勤務している中、子育てをされながら笑顔で働かれている女医さんもいらっしゃり感動を覚えると同時に、働く環境としての工夫を腸班の岡林先生よりお話し頂き感銘を受けました。

カンファレンスはそのほとんどが、コロナ禍の影響によりZoomで行われておりました。医局全体のカンファレンスからメディカルの方々を含めた入院患者のリハビリカンファレンスなど、様々なカンファレンスに参加させて頂きました。医局全体カンファレンスの際、私が自己紹介をさせて頂いた後に北川教授より東京でゆっくり遊んでいってねとお声かけ頂き、都会に出てきて張りつめていた私の緊張が非常に和らぎました。心より感謝申し上げます。また、肝胆膵・移植班の長谷川先生と共にアルコール性肝硬変患者の肝移植に関するカンファレンスに参加させて頂きました。私ども琉球大学病院消化器・腫瘍外科でも高槻教授就任後より生体肝移植を行っており、沖縄県という土地柄もありアルコール性肝硬変患者の移植は比較的多く、消化器内科との連携はもちろんのこと、精神科や看護師を含めた術前と

術後の精神的な部分や飲酒状況、欲求に関するカンファレンスは非常に有用と感じました。

今回の研修で帯同させて頂いた上部消化管班を含め医局全体の雰囲気が非常に明るく暖かく、全く緊張しなかったとは言いきれませんが、程良い緊張感の中で研修させて頂くことができました。また、研修時の東京は真夏であり沖縄県よりも明らかに暑く、沖縄県の正装であるかりゆしウェアでの研修をお許しくださり、誠にありがとうございました。

今後時間はかかると思いますが、現在慶應義塾大学病院で行われている医療、手術が今後沖縄県でもスタンダードとなっていき、私が携わることになると思うと身が引き締まりました。この貴重な経験を糧に沖縄県の医療発展に寄与できるような外科医となるために、今後より一層努力して参ります。

最後に、今回私をご推薦いただいた琉球大学消化器・腫瘍外科 高槻光寿教授、快く送り出してください私が不在の中、ご迷惑をおかけしました先生方に感謝申し上げます。